

第2節 古代の長崎県

MEMO



1 防人と国境の島

(1) 防人

唐衣 からころも すそに取りつき 泣く子らを
おきてぞ来ぬや きおも 母なしにして

さきもり
(防人として出発しようとした時)すそにすがりついて泣く子どもを置いてきてしまったよ。母親も(死んでしまって)いないのに。

みんなで考えてみよう!

防人の任務とは、その仕事を任された者にとっては何のようなものだったのだろうか？



防人の想像図

これは、万葉集にでてくる防人の歌である。

防人とは、奈良時代に国境の守りについた兵士のことであり、東国地方の人々が中心になってその任務にあたっていた。

対馬市美津島町には、古代の朝鮮式山城の金田城かねだじょうがあり、防人はそこで警備にあたったといわれている。配備された防人は、任期の3年間の警備につくほか、田畑を耕して食料も作ることであった。

(2) 金田城

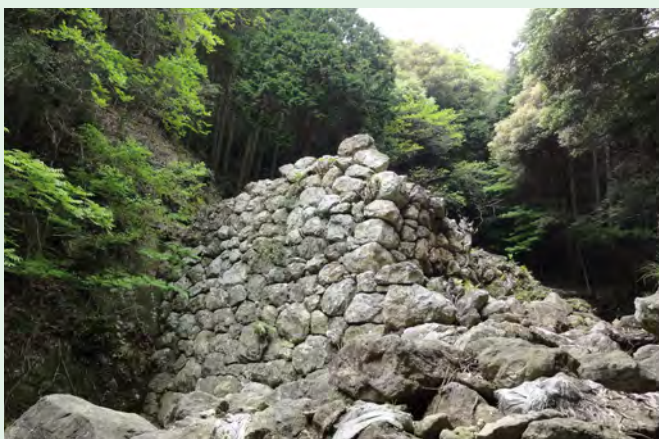
この金田城は、どういう目的でつくられたのだろうか。

朝鮮半島では、新羅シルラが勢力を増し、唐と結んで半島の統一を進めていた。半島の南に位置する百済ペクチェと国交を結んでいたわが国は、百済への救援軍を送ったが、663(天智2)年、白村江の戦いで敗れ、兵を引き上げた。

その後、大和政権は、唐・新羅がわが国に攻めてくるのを防ぐため、国防の前線基地として金田城を築き、防人を置いた。ここには、険しい山を取り囲むように石垣が築かれ、海からの入口には、城戸きど

MEMO

と呼ばれる三つの城門が造られており、連絡するためののろし台（烽）も置かれていた。



金田城跡

(提供:長崎県観光連盟)

1982（昭和57）年に国の特別史跡に指定さ

れ、1994（平成6）年には、建物の柱の遺構が発掘され、兵士がたてこもる防衛拠点としての役割が裏付けられた。



2 『肥前国風土記』と長崎県

(1) 風土記がつけられたころ

713（和銅6）年に、「国や郡の名前、地形や土地（土地が肥えているかどうか、山、川や野原の名前の由来）、地方の特産物、老人たちの伝える話などを報告せよ。」という天皇の命令が出された。その報告書は、のちに風土記と呼ばれるようになった。『肥前国風土記』は、現在残っている五つの国の風土記の一つである。

肥前の国は、現在の長崎県と佐賀県にあたる。対馬や壱岐はそれぞれ対馬国、壱岐国として別の国であった。対馬や壱岐がそれぞれ一つの国となっていたのは、国境の島として大陸との間の重要な位置にあったからである。肥前国としての長崎県は、松浦郡（一部）、彼杵郡、高来郡からなり、神代郷（雲仙市国見町）、値嘉郷（五島列島）などの地名が見られる。また、各郡には政治や文化、産業の中心



十園遺跡

(提供:雲仙市教育委員会)

となる「郡衙」とよばれる大規模な施設があったとされており、2004（平成16）年から発掘調査が行われた雲仙市国見町の十園遺跡では、郡衙と思われる建物や水路跡、大量の土器などが発見されて

MEMO

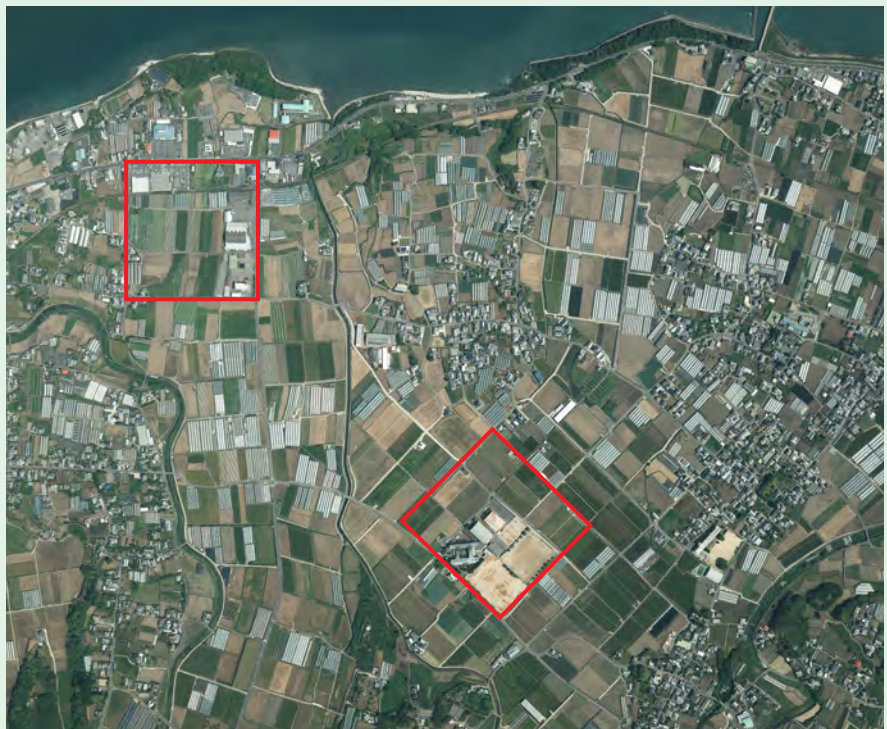
いる。

(2) 奈良時代の人々の暮らし

風土記がつくられたころには、条里制がおこなわれていた。これは、農民に土地を平等に分け与えるための碁盤目状の土地割りのことである。県内では、大村市郡川河口付近、諫早市小野、平戸市田平町、雲仙市の国見町、吾妻町、瑞穂町などにもその跡をみることができる。これらの地域では、古くから水田が開かれていたことを示している。

松浦市に御厨町という所がある。「御厨」とは、魚や貝などの食料品を朝廷などへ献上する地域で、やがて莊園と同じような性格をもってくる。古くから、今の松浦市を中心にして佐賀県北部から平戸市、北松浦郡、五島列島までも含んだ広い地域は、皇室領の宇野御厨荘と呼ばれていた。

『肥前国風土記』によると、値嘉郷の住民は、牛や馬をたくさんもっていることや、海産物のあわび、海藻、魚類がよくとれていることなどが書かれている。



条里制遺構（雲仙市国見町）

（出典：国土地理院ウェブサイトのデータの一部追記）



3 大陸遣使の中継地

(1) 五島を旅立った最澄と空海

天台宗を開いた最澄と、真言宗を開いた空海は、804（延暦23）年に遣唐使船に乗り、五島を渡って中国へ渡っている。この遣唐使船は、相子田の浦（南松浦郡新上五島町上



空海ゆかりの寺 大宝寺

（提供：五島市）

五島が五島市久賀島といわれている）を出港した。航海の途中、暴風雨にあい、1か月余りの漂流の末、目的地にたどり着いている。

二人は、中国で仏教などの教えを学び、最澄は対馬を通り、空海は五島を渡って帰国したといわれている。



大陸への航路



五島の遣唐使船ゆかりの地

みんなで考えてみよう!

空海と長崎との関係について調べてみよう。

MEMO



遣唐使船想像図

(2)大陸への航路と五島

『^{ひぜんのくにふ}肥前国風土記^{どき}』には、五島からの遣唐使の航路が書かれている。この航路は南路といい、東シナ海を直接横断する航路であった。初めのころ、遣唐使船は壱岐、対馬を^{たいほう}通って朝鮮半島沿いに進む北路を利用して^{そうなん}いた。その後、朝鮮半島との関係が悪化し、702(大宝2)年の遣唐使船からは、平戸や五島から南西諸島を^{そうなん}伝って、中国へ向かう南島路を利用するようになったが、この航路は日数がかかるうえ^{そうなん}遭難も多かった。

そこで、777(宝亀8)年からは南路を利用するようになった。

894(寛平6)年の遣唐使廃止後も、五島には唐や宋からの商船がたびたび寄港し、大陸の進んだ文物などがもたらされた。

